



岡本かの子全集

第一卷

TARO

7J 91010231

岡本かの子全集 第一卷
昭和四十九年九月一五日初版第一刷發行

著 者 岡本かの子

發行者 高橋直良

發行所 多樹社

東京都千代田區神田神保町二一八

電話東京二六四一〇三四六

振替東京七七五七

印刷所 株式會社太洋社

製本所 有限會社三和製本所

製函所 株式會社光陽紙器製作所

本文用紙抄造 王子製紙春日井工場

表紙用クロス 日本クロス株式會社

裝 畫 岡本太郎

裝 幀 栃折久美子

第一卷 目次

かやの生立	三
夫人と畫家	三
歸 去 來	三
黃昏前後	四
好い手紙	五
阿難と呪術師の娘	六
鬼子母の愛	一〇六
新神祕主義	一二六
寒山拾得	一四六

ある日の蓮月尼	二〇一
象牙の牀	三三
街の尼僧の話	三六
愚人とその妻	三〇
汗	三七
ドーヴィル物語	二四〇
秋の夜がたり	二五
母と娘	二七
狂童女の戀	三〇〇
豆腐買ひ	三〇七
ガルスワーシーの家	三七
百喩經	三四〇
取返し物語	三九
茶屋知らず物語	六三

健康三題	三九
鯉魚	三五
上田秋成の晩年	四〇
或る秋の紫式部	四六
莊子	四七
小町の芍薬	四五
解題・校訂	四九

小

說

I

かやの生立

一

「かやの顔は、眼と口ばかりだな。どうも持参金付きの嫁入でもせにあらねえかな。」と云つたりしていつも茶の間の長火鉢の側に坐つて、煙草管をぼかん／＼とたたいてばかり居る癖の、いくら大笑ひに笑つても、苦笑ひの様な表情しか出ないこのお爺さんが、かやの本當の祖父でないことは、このお爺さんが、時々——半年に一度くらゐ——寒い季候には茶色のむく／＼した襟巻と、同じ色のとぼけた様な（御隠居さん帽子）を冠つたり、暑い時分にはお爺さんの胸板の邊によれ／＼して居る黄色つばい幾筋かの皺が透いて見えるほどな、薄いびら／＼な白地の着物や、光る羽織を着て、村にはまだ一臺しか無いといふ「人力車」を、「由」といふ藥屋の息子から車夫になつたといふ若者が、うちの長屋門の前へ、曳き寄せるのにひらりと乗

つて、

「ではな、二三日實家を見廻つて来るからな。」と云つて、何となく機嫌好き相に其處へ見送りに出て居るうちの者達にぼつくり首を下げて、やがて往來に添つて建ち並んで居るかやの家の土藏の盡きた處から曲つて這入る横道へ、威勢よく人力車に隠れて仕舞ふのである。この様なことにつけて、このお爺さんが本當の祖父でないことをかやも知つて居たのである。そればかりでなく、かやの家には今一人、これと同じ種類のお媼さんが居たのである。お媼さんは薄い髪を切り下げにして幅のせまい黒縹子の丸帶を、貝の口に結び上げた、少し曲つた腰を、たたき／＼、お爺さんが實家へ歸つて留守の夜などはとりわけ廣い家のなかをぐる／＼見廻つて、下男や下女に、内外の戸締りなどを厳しく云ふのであつた。

このお媼さんも時々、お爺さんと同じ様に、「では、ま、一寸、かへつて来るよ。」などと云ひ出すのであつた。でもそれは大抵、一年に一遍、お正月の頃であつた。そしてやつぱり「由」の人力車を呼びにやるのであつた。はき／＼した「由」はちつきに、きり／＼とした紺股引と紺足袋を穿いてやつて来るのであつた。女だけにお媼さんの仕度はお爺さんのよりかなり長かつたので、「由」は随分待たされなければならなかつた。その間、「由」は下男の吉藏が焚火をして居る内庭へ薪割臺など運んで來て腰をかけてあたたまつて居る、膝に黒の碁盤縞の俵の前掛の毛布を、きちんと疊んで置いたりして。

俵は、眞白に霜柱のたつて居る門前の土の上に置かれてあつた。くろ／＼と塗り磨かれた車體も、その兩側に付いて居る長い銀の編針を束ねてひろげた様な二つの車輪も、すべてつや／＼と掃除が行き届いて居て、さはやかな朝の明るさのなかに、何か尊いものの様に見えるのであつた。

「あら、あら、みんな來て見な。」

などと一人が呼ぶと、朝飯前の遠走りを許されぬ近所の子守達には、とりわけ珍らしがられるのであつた。

ばた／＼、と五六人は直き集まつて来て俵のまはりぐるつと取りまいた。背中の赤ン坊が人が急に感付いた様に泣き出したりするものもあるし、なかには南京玉の指はめを二重も抜いたどす黒い中指の先きで俵の手掛けをすつと撫でゝ見て、なめらかな黒塗りの表面へ、粉の様な白い筋があり／＼と浮いて出ると、きや、つと笑つて逃げたりした。

「こーれ、めろつこども。」と「由」と吉藏が出て来ると、子守達は我勝ちに駈け出した。

「よい、よい、よい。」と云ふやうな歩き具合ひでお祖母さんがまだ朝の光が届きかねて居るくらゐ奥深い玄關の廂から出て来た。その細長い瘦せた體をふくよかに包むお祖母さんの被布の、何とかいふ白茶地には、眞白な鳥の羽毛が、ふさ／＼と織り込まれて居るのであつた。

「よい、よい、よい。」

といふ具合ひにお祖母さんが歩くと、お祖母さんの體一ぱいの羽毛が、同じ調子で、

「ふわ、ふわ、ふわ。」

と揺れるのであつた。これは鶴の羽毛であるとか、やは教へられてからこの羽毛を着けて居た鶴を想像するふしぎな快感とお祖母さんの「他所ゆき。」といふかすかな好奇心が交つて、夢の様なぼつとした氣持で、この被布の姿のお祖母さんを見るのであつた。

お祖母さんが最後に

「よいとな。」

と大きく調子をとつて、車臺へ登ると蹴込みに敷いてある獅子の毛皮のやうなもぢや／＼した布の上に「つあらつ」と擦れる音がして、新しい後齒がかすかに刷毛毛でのべた様な赤土のあとをつけた。「由」が轆棒を上げて走り出すと、いつの間にか皆のうしろに來て居た老犬のくまが、わん、わん、吠えてあとを追つた。

俵の背にくまの姿が横にひしやげて、ちんちくりんに寫つた。俵の影が見えなくなると、この古い宿場の往還も、にわかに幅廣く見渡せて、霜の溶け沁みた路上の土に、近くの村落から集まつて都の方へ通つて行く荷車の軌の跡が、幾筋も續いて居た。

二

お媼さんの俵も、やはりお爺さんの時と同じ方角へ向ふのであつた。かやは、とつとと走つて行つて裏門の扉につかまつて停つた。土藏の横を曲つたお媼さんの俵が、邸をめぐつた長い珊瑚樹の生垣に添つて走り盡すと、やがて、茫としてつきる處が見えぬほど、廣く續いた耕地の中心を一直線に専斷した平坦な縣道に、敏捷な、輕快な姿を現はすのであつた。

しやり、しやり、びち、びち、かり、がりつと縣道の小砂利を咬む轍の音が、かすかにかやに聞きとれる様な氣がした。俵の齒を編む無數の銀線が、きら、きら、びか、びか、と鋭く光を放つた。

「おばーさん。」

とかや、は大きく呼ばうとした。が聲が喉元へぐつとつまつて仕舞つて、もうとても呼ぶでも追つても及ばないほど遠ざかつて行くお祖母さんになつてしまつた様な絶望に似た幼い感情が、一ぱい胸へこみ上げて來てかや、はかすかに涙ぐんだ。お祖母さんは一度も振り返つては呉れなかつた。そして四角い俵の背の眞中あたりへ、わづかに、ちよん、と見せて居た切下げの髪の後姿も、小さく小さく、ぽつんと一つ黒子を打つた様になつた頃、俵は野のはてに近い小學校と、鎮守様の杜の間へとうとう隠れて仕舞つたのである。太陽は次第に高く登つて來た。きちん、と手際よく、鋤き耕やされて筋目正しくならされた倍赭色の土の面の露霜がと

けて、もや／＼とした白い水氣が、幾條も／＼立ち初めて太陽の面を掠めたり、斜な光線にからんだりする。「かあ——」。

と一羽の大鴉が鳴くと、あちからも、こちからも、ぼち、ぼち、とした積葉のかげから、くろ／＼とした翼を豊に張った無数の鴉が、次から次へと飛び立ち始めた。

「おや、見つけた、見つけた、こんな處に居なさったか、おかやちゃん。」

斯ふ云ひながら、色の白い太り肉の體を其處へ表はしたのは、かやの婆やのお常である。婆やは兩手を廣げる様な恰好をして、かやに近づいた。「さ、お汁がさめますよ、お朝飯にしましよ。」と云つてかやの體を半分抱き乍ら納屋と裏庭の竹の四つ目垣の間を通つて、母屋の茶の間へ連れて來た。

太い古い土臺木を跨いで這入ると、廣い薄暗い臺所の正面に、びかびか、塗りの光る腰の高い竈が三つ程も火附口を並べて嚴めしく据ゑられてある。土間から細縁を上ると其處は六疊敷ばかりの板の間へ薄い藺吳座が延いてあつて、女中や下男の、古い飴色の箱膳が並んで居る。茶の間は其より一段高く仕切られた八疊程の黄色つばい座敷である。

正面の柱には大きな古めかしい八角時計が高く掛けられてあつて、其下には、びらびらした何かの受取紙の赤ちみて古くなつたのまでが、盛り上る程重ねて留めてある竹の「指し」や、くねくねとした字で書いてある青や赤の封筒だの、端書だのが、ぎつしり詰つた状差しが、段々に釘付けられてある眞下には、小形の古い机が置かれて「土地臺帳」などと書かれた部厚な帳簿が山の様に積み上げられて、片隅に球の大粒な算盤が一ついつも添へられて居るのであつた。厚い綿八端の座蒲團が机の前と兼帯になる様な具合に敷いてあつて、檜縁の巖丈な長火鉢が、お爺さんを前に、大きな眞鍮の湯沸を太い鐵の五徳の上にかけられてこの座敷の中心の様に構へて居る。お爺さんは座蒲團の上に眞四角に坐つて朝飯を喰べて居た。

「かやはどこに居たのか。」

と、お爺さんが厚いべつかふ縁の眼鏡の下から、底光りのする眼をじつとかやの方へ据ゑると、太く揃つた眞白な眉と眉の間に深い皺が二筋ほどあり／＼と表はれた。かやはまた叱られるのではないかと思つて、びっくりとした。

色々な野菜の煮たのなどが澤山載つたお爺さんの脚の高いお膳に並んで、薄べつたい糸目のお膳のお姫さんの今朝は無くて、お爺さんと反對の側のお姫さんの長火鉢の前の席には、いつもお姫さんが吸ふ刻み煙草のふわふわ盛つてある、栗の實の肌のような、すべ／＼の丸い小さなくりぬき細工の煙草入れが一つぽつねんとして居るのが、かやには何となく淋しく眺められた。かやは、長火鉢からは少し離れた、次の間への障子際の、木目の新しい桑の火鉢に、一ばい火の盛られてある側で、赤いお箸や赤いお膳や、凡て赤づくしの器で、婆やと一しよに黙つてご飯をたべた。

穀倉の前の日向に莖を敷いて、里芋の皮をむいて居る下女の方へかやを連れながら婆やは行つた。

「おすめさん、これ（と云つて小指を出して）が居ねえでまたしばらく、これ（と云つて親指を出して）がよけいと怒鳴るべいな。」

と婆やが前ごみに小聲で云ふ。

「ふんとにさ。」

と、おすめは小さな斜視の眼を、ちよいと見當違ひの方へ光らして薄笑ひをした。

婆やや、おすめが寄るといつもお爺さんやお姫さんの噂である。その外、下男や、日雇ひのお民などの饒舌から、かやは何時とはなしにこの山城屋の奥向きの事情を幼い心にも大方は判断し得る様になつて來た。

山城屋とは、かやの家の家號である。維新前には多くの土藏を建て列ね、數頭の馬車を貯へて、江戸の諸大

名の御用商人を勤めて居た。其後諸大名が解役されると同時に、山城屋も商途を止め、土藏や邸の外廓をせばめ鉅萬の富を緊密に包掌して、質實な家格の威容を近郷に示して居る内、一夏の悪疫に家内は大方死に盡して、かやの父である幸吉ばかりが、三歳ばかりの幼児のままで取のこされた。幸吉は家産と共に近い土地の重縁の親戚に守られて十三歳まで育つた後修業の爲に或る家塾に遣られ、十九の年に歸宅してお邦と云ふかやの母を、三里程離れた豪農の家から娶つたのであつた。

幸吉は、三年程前から、長い胃腸病を根治する爲に、妻のお邦と、十二になる正太郎といふ長男と、九歳の裕次と元から家に使つて居た二人の小間使を連れて、東京の山の手の或大きな病院の近くに出養生に行つて居るのである。今度の留守役は、前の重縁の後見人に何か不始末があつたとやらで、嚴しい親族會議の末に、幸吉の叔父叔母である、お爺さんとお媼さんにと定められた。お爺さんは東海道で有名な古驛に近い大きな農家の男隠居で確乎した當主の子息もある身の上で、お媼さんはその驛の菓子商を娘の養子に譲つて來て居た。お爺さんにもお媼さんにも、もう、とうのむかしに、妻も夫も無かつた。お媼さんは、お爺さんの直ぐの實姉なのであつた、その上お媼さんの確乎した中にも何處か優しみのある奥床しい性質には、氣難しいお爺さんも、一目置いて居たのであつた。

三

「かや、また、眞白に塗りこねられたな、よせや、役にもたたねえじゃねえか、お常さん。」とお爺さんが例の様に、苦り切つて云つた。

「へへえ……へえ……。」

と婆やは、おどくするかやをお爺さんの前から自分の後にかくしながら、丁度納屋の戸から出て来たお媼さんの方へ視線を向けて、誰にとも分らぬ様に誤間化し笑ひをした。その無理にゆがめた唇のほとりから逃げた筋肉が、突拍子もなく頬骨の上部まで丸く高まつて、てらてらした湯上りの顔中の皮膚の艶を一所に集めてしまった様に、茶の間のランプの光を受けた。

「どれどれ、見せな、かや。」

と、お媼さんは、婆やの後ろにかくれて居るかやの顔をのぞき込んで、

「なるほどな、眞白なお多福さんが出来上つたな、あはムムムムだがな、女の子だもの、お白粉ぐれいはな、いいやなあ あはムムム。」

お媼さんは、男の様な大容な聲を出して笑つたあとで、齒の抜け落ちた唇の窪みを、もごりもごり、と動かし乍ら、取り做し顔に、お爺さんと婆やの顔を見くらべた。それでもなほお爺さんが、苦り切つて居るので、

「まあ、御めん遊あせや。」

と婆やは頭を一つべつたり下げて、逃げる様にかやの手を引いて、かやと二人の寢所に宛ててある離れ座敷の六疊に續く廊下の方へ出て仕舞つた。かやもほつと安心すると、急に湯上りの温つた足の裏に、木肌が冷たく沁み渡つて、せい／＼した氣持になつた。奥の間、次の間、佛壇の間、といふ順に、内庭の木立の繁み近くに迄建て連ねられた幾つかの座敷に沿うた縁廊下は、遙々と見渡すほどに長く延びて居た。その黒く滑かに拭き込んだ板の面を夏の夜の雨あがりの涙ぐんだ様な月がほのかな光を、水の様に流し湛えて居るのであつた。太い弛んだ婆やの足は、べたりべたり、とその上を歩いた。

廊下が盡きると一間許りの濡れ縁が架つて居る。

「滑りなはるな。」

と婆やはかやの手をしつかり握つて、濕つた足場を探り／＼渡つた。

離れの六疊へ這入るや否や、婆やはかやの手を握つたまゝ其處へ體を投り出す様にしてべたりと坐つた。

「爺い、うるせい爺いだわなあ、おかやちゃん。」

べつと婆やは半分ばかり赤青い様な舌を吐いた。その舌は、婆やの太り肉に似合はない薄く、へなへなとして居るのでかやはそれを見るのがいつも不氣味だつた。それにもかかはらず、婆やはこれを一日のうちに何度も繰り返すのが癖であつた。婆やは六十に近いといつても、まだ髪も黒く、丈も女としては高い方だし齒もよく揃つて居た。元は山城屋と同村の遠縁に當る某家から出て、十五の年から二十年近くも、江戸の大名を二三ヶ所も渡り奉公に歩いて居た。そのうちに四十近くになつて浪人上りの年下の男を連れて村へ歸つた、古道具屋を營んで居た。三年前に若い夫に死なれてからは、山城屋へ容れられて、かやの守役をずつと勤めて居た。

婆やを始めて見た時、かやは云ふに云はれぬ異様な感じを受けたのである。

「おや、これがお嬢ちゃまで、おかやちゃん、さやうであ。」

と、お嬢さんからかやの方へ向けた笑顔は、しゅつと引き釣つた兩唇とは反對に、切れ長の眼瞼が、二筋三筋の皺を走らせて流れる様に眼尻の方へ上品な愛嬌を溢して居た。笑ひが納まると、婆やの顔は別の顔の様に變つて見えた。上目瞼は薄黒い皺のまま大きな眼球の上に高まつて、鼻柱と頬骨との間の眼下の筋肉の著しいたるみは、丁度、色の褪せ切つた青蚊帳の古い端片れを吊げた様に見えた。左の眼の下にはその隈の中に、更に色の濃い大きなほくろが一つ指先きで押した様に付いて居るので、一層陰慘に險惡に見えたけれども、むつくりと延びた形の宜い鼻が、丸顔の筋肉や皮膚の皺を程よく調節して、小さく結んだ唇にはまだ若